

2015 (平成 27) 年度  
法務研究科 法務専攻 (法科大学院) B 日程 入学試験問題  
「小論文」  
(60 分)

注意：解答はすべて解答用紙に記入すること。

【問題】以下の文書 1 を読んで各問いに答えなさい。(配点 100 点)

(A) 筆者の主張を解答用紙 10 行以内で要約しなさい。

(B) 筆者の主張に対してどのような反論が考えられるかを述べなさい。

文書 1

近頃スマートフォンを見ながら街を歩く若者を多く見るようになった。2014 年時点で日本でのスマートフォンの普及率はほぼ 50 % に達しているという。筆者はオフィスにはパソコンを持ち、通常の携帯電話は持ち歩いているが、スマートフォンは持たないので、何故こんなに普及しているかあまり理解できない。自宅や街頭で情報が必要なことはほとんどないし、特に急いで入手しなければならない情報もあまりない。

スマホはインターネットに接続できるし個人情報管理できるし、音楽を聞いたり、カメラとして使えたりたしかに便利なのだろうが、筆者にはオフィスでインターネットが使えれば充分である。かなりの人達がゲーム等に使っているようだが、筆者はゲームには興味がない。人生の毎日毎日がゲームのようなものだと思っているので、ネットやスマホでゲームをやろうとは思わないからだ。

考えてみれば、今の日本には情報が氾濫している。筆者のように定期的に本を執筆する人間にとっては極めて便利だ。かつては、書籍等を購入して調べなければならなかったものが、インターネットで瞬時に手に入る。要するに執筆に必要なデータが常に手元にあるという訳なのだ。ただ、どういう情報をどう使うのかというプランが最初になれば、大量のデータも役に立たないのは当然のことである。

又、スマホでも携帯でもコミュニケーションに便利なことは言うまでもない。いつでも、誰とでも連絡がとれるという訳だ。多くの若者達もメールを多用し、常に友人等とコミュニケーションしているようだ。しかし、それでコミュニケーションの広さや深さが改善されているかとなると話は別だろう。実は、筆者は毎年、夏休みの二週間、全国から 160 人前後の高校生を集めて「次世代リーダー育成塾」というサマースクールを組織している。経団連の会長に塾長になってもらって、筆者は塾長代理として十数人の著名な講師にきてもらって、講義やディスカッションをしてもらうのだ。幸いなことに、薄謝で山折哲雄・川勝平太・金澤一郎・明石康・マハティール・モハメド等の各界の著名人が講義をしてくれている。

このサマースクールで必ず生徒に要求することが一つある。それはスクール開催中は、スマホや携帯電話を事務局に預けさせ、使わせないことだ。多くの生徒達は頻りにスマホ等を使うが、相手は限定され、そのことによって幅広いコミュニケーションができなくなってしまうからだ。せつかく全国から 160 人も集ったのだから、その中で会話やディスカッションをしてもらいたい。

つまり、スマホ等の通信機器の普及はたしかに便利で対話の場を拡大するという側面もないことはないのだが、多くの場合、逆にその範囲を狭め、狭いサークルの中ではやりとりをより頻繁にしているだけということが少なくないのだ。

又、街頭や電車の中でゲームに興ずることによって、せつかくの街の様子や人々の動き等に無関心になり、世間を逆に狭くしているようなのだ。筆者はたまにしか電車には乗らないが、休日等に乗ると周りの人達を見るだけで結構エンジョイできる。様々な人間を観察するのは面白いことだし、又、若干ではあるが世の中の動きも理解できるというものだ。情報というのは別にインターネットの中にだけあるのではない。街角や電車の中に生きた情報がころがっているのだ。外国の街等でよく老人達が道路沿いに座り、道路を行きかう人達を見ていることがある。筆者も時々真似をするが、いわば生きた勉強になることが多い。筆者を含めて多くの人達は意外と他人のこと、あるいは世間のことを知らないことが多いからだ……。

情報はたしかに氾濫している。しかし、その情報を使えなければ、意味はない。まず、これだけ多くの情報を使うためには、情報を整理しなくてはならない。これがなかなかの難物だ。よく情報をファイルする人がいるが、ためておけばいいというものではない。ファイルがたまるばかりではどうしようもない。要はどのファイルを捨てるかである。

つまり、情報を整理するということは、情報を捨てるということなのだ。これだけ多

くの情報に一つ一つつきあっていたら身が持たない。ほとんどの情報は捨てるしかないのだ。問題は捨てる方だ。そしてその捨てる方が考えるということなのだろう。

捨てるということはポイントをつかむということでもある。要するに、目的に応じて、情報を整理し、そのエッセンスを抽出するということだ。筆者はよく、本は読むものではない、見るものだと主張することがある。文章の文学的香りを味わうためには、精読や繰り返し読むことは必要かもしれない。たしかに、川端康成の『雪国』の冒頭の「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」は名文だし、何度読んでも雪国の情景が目には浮かんでくるような文章だ。

しかし、多くの書物のエッセンスは短いもので、本1冊をていねいに精読する必要はない。筆者もしばしば本を執筆するのでわかるのだが、200頁～300頁の本を書いても伝えたいメッセージはせいぜい1ページで書けるものだ。本を見るというのは、見ることによってそのメッセージを読みとるということだ。

おそらく筆者が伝えようとしているメッセージと読者が汲み取るメッセージは多くの場合必ずしも一致はしないのだろうが、それが本を読むことの最も重要なポイントではないだろうか。文章のうまさを楽しんだり、新たな情報を得るためにという読み方もあるのだろうが、多く場合は筆者のメッセージを汲み取り、自らの思考の糧にするということが重要なのだろう。

もちろん、人それぞれによって、又、同じ人でもそのとき置かれた状況によって思考のパターンは変わってくるだろう。同じ情報はその状況の違いによって全く逆の反応をもたらすこともありえないことではない。その人が育ってきた環境、あるいは文化的背景によって情報への対応に多様にならざるをえないからだ。

ただ、しっかりとした思考のパターンを持っていないと、情報への反応は鈍いものになってくるのだろう。1つの情報から10の示唆を得る人もいるし、全く何も得られない人もいるのだろう。自らの枠組みに従って情報を整理できれば、将来の予知やそれにそった行動を準備することもできる。少なくとも、その時点で、自分や家族あるいは国にとってその情報がいかに重要なのかそうではないのかを自らの思考の枠組みの中で判断する訳だ。

残念ながら、現在の日本を見ると、情報は氾濫し、多くの人達がそれなりの情報を入力しているにもかかわらず、思考が大きく進展しているようには思えない。いや、むしろ、情報がうまく整理できず思考が停止してしまっているように思える。そして、それが人々の不安を増幅し、必要以上にメールや携帯を使って親しい人々と頻繁に対話しているようにも思える。対話が重要でないとか、ましてや必要ないというつもりはない。しかし、ものを考えるということ、ある意味で、一人になるということだ。一人でじっくりと情報を整理し、自らの思考の中にその情報を取り込んでいく訳だ。

しかし昨今、一人になれない人達が増えてきている。洪水のような情報の中で不安にかられ、むやみに人と接触したがる。むれることによって不安を解消しようとしているのだろう。大切なのはむれて情報を確認しあうことではなく、しばし情報を切断して一人になることではないだろうか。所詮、人間は一人なのだという自覚がない人々が増えてきているのは問題ではないだろうか。

(出典：榊原英資「情報の洪水と思考の停止～榊原英資の日本改造論」表現者 54号 11-13頁(2014年)。なお問題文では、縦書きの原文を横書きに変え、漢数字を算用数字に変え、漢字のルビを省略している。)

入試日程 B 日程 出題科目名 小論文 \_\_\_\_\_

## 1. 出題の意図

問題文は、スマートフォンをはじめとする情報機器の発達により、情報量の増加とコミュニケーションの変容という2つの変化があったことを述べ、それが良くないことだと主張したうえで、対応策を述べている。

問題Aは、情報機器の発達による二つの変化、この変化が良くない理由、対応策の3点がきちんと読み取れているかを見る問題である。

問題Bでは、情報機器の発達による2つの変化を良い側面から捉えて考えていくことになるが、2つの変化の両方について反論を述べているか、論理的に無理のない反論になっているかがポイントとなる。

## 2. 講評

1 問題文は受験者の身边にも存在する事象をテーマにしているため、テーマ自体が難しいために問題文の内容が理解できないとか、反論を組み立てることが難しいということは生じることなく、読解力、文章構成力を含めた受験生の文章能力がそのまま評価の差になって現れているものと思われる。

2 問題(A)については、筆者の主張を、筆者の言葉・キーワードを用いつつも、自らの言葉で再度組み立て直し、端的に主張することができていた答案是、高評価の答案となり、他方、筆者の主張をとらえ間違えていると考えられるものはもちろんのこと、問題文の一部を切り貼りしただけのものは、低評価の答案となった。

問題(B)については、筆者の主張を理解した上で、理由を述べつつ、説得的な反論を展開できている答案是、高評価の答案となり、他方、筆者の主張に対する賛否自体が理解しにくく冗長に書かれているもの、文章として書かれている内容が判然としないもの、筆者の主張に対してかみ合わない反論をしているものは、低評価の答案となった。